

エピソード2 「電車に乗ると息ができないほど苦しくなる」

美咲、25歳女性。宮城県の郊外に住む会社員。大好きだった祖母が半年前に死去し、しばらく気持ちが落ち込んでいた。それでも持ち前の明るい性格で徐々に元気を取りもどしていった。

初夏のある日のこと、美咲はいつものように電車で仙台まで通勤していた。朝の通勤電車は、多くのサラリーマンでごったかえしていた。ムンムンした熱気が車内に充満して、美咲はわずかに息苦しさを感じた。何気なく窓の外をながめると、遠くの国道上に交通事故の現場が見えた。路面には赤い血が流れており、重大な事故であったことがうかがわれた。突然、心臓が激しく高鳴るのを感じた。

その1ヶ月後にも同様の症状が出現した。やはり満員電車のなかだった。このときは「心臓が破裂するのはないか」と思うほどの恐怖に襲われた。美咲は我慢できず、思わず途中の岩切駅で下車した。駅のホームにうずくまっていると30分ほどで症状は改善したものの、会社には遅刻してしまった。心配した上司に、病院への受診を勧められた。

翌日、美咲は近所の内科クリニックを受診し、心電図や採血などの検査を受けた。検査では何の異常もなく、診察した医師からは精神科受診を勧められた。美咲は内心それを快くは思わなかった。

それからというもの、通勤前にはいつも「電車に乗ったらまた発作が起きるのではないか」という不安に襲われるようになった。何の異状もない日もあった。しかし、日が続つにつれて確実に発作の頻度は増えていった。しまいには電車に乗ると、毎回のように入作が出現するようになった。その症状も、呼吸困難、動悸にくわえて、発汗、めまいなど多彩になった。

秋になると、美咲はとうとう全く通勤できなくなった。